



下田南遺跡第1期調査範囲 全景 (西より)



下田南遺跡周辺の遺跡

## 下田南遺跡(しもだみなみいせき) 発掘調査現地説明会 配布資料

所在地:愛知県岩倉市川井町地内  
 調査原因:川井野寄(かわいのよ)地区工業用地開発事業  
 発注者:岩倉市教育委員会  
 調査機関:株式会社アーキジオ 中日本支店  
 調査期間:令和元年6月~令和3年3月  
 調査面積:約4.3ha(1面目:3.1ha、2面目:1.2ha)

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、企業庁と岩倉市が共同で取り組んでいる川井野寄(かわいのよ)地区工業用地の開発事業に伴って行われているものです。発掘調査に先立ち、遺跡の有無・範囲等を確認するために、愛知県教育委員会と岩倉市教育委員会が協力して、これまでに3回の事前調査(試掘調査:平成28・29年度、遺跡範囲確認調査:平成30年度)が行われています。

今回の現地説明会では、今年度に調査を行った1b区、1c区、1e区の調査成果について説明します。

### 2. 遺跡概要

#### 1) 地理的環境

下田南遺跡が所在する岩倉市は、木曾川によって形成された沖積(ちゅうせき)平野上の濃尾(のうび)平野に立地する自然堤防帯に位置します。

このため、市域の土地は北東から南西方向に向かって低くなっており、北東部の井上町が標高12.5m、南西部の野寄(のよ)町は標高7.5mを測ります。このように緩やかに傾斜する市域の中央を、一級河川の五条川が南流しています。下田南遺跡は、南流してきた五条川が大山寺で西に大曲した2km地点の右岸側に所在します。

#### 2) 歴史的環境

下田南遺跡の周辺には、縄文時代から弥生時代の集落が確認された権現山(ごんげんやま)遺跡(岩倉市)をはじめ、弥生時代から古代にかけての水田遺構が確認された伝法寺野田(でんぼうじのだ)遺跡(一宮市)、古代寺院である薬師堂廃寺(やくしどうはいし)跡(岩倉市)等、古くからこの地域一帯に人々の生活が営まれていた事を証明する遺跡が所在します。

今回の発掘調査では、古代から中世の遺構が確認されています。主な遺構は古代に属しており、竪穴住居12棟以上、掘立柱(ほったてばしら)建物22棟以上のほか、道路遺構や水路とみられる溝状遺構、土坑などです。遺跡全体を概観すると、調査区域の中央が微高地状になっており、その部分に竪穴住居などの居住施設や倉庫と考えられる掘立柱建物が集中する傾向が見られます。

これらの遺構からは、土師器(はじき)の壺や須恵器(すえき)の坏(つき)・蓋(ふた)・甕などの土器類や鉄滓(てつさい)や砥石(といし)、白玉(うすだま)などたくさんの遺物が出土しました。





竪穴住居

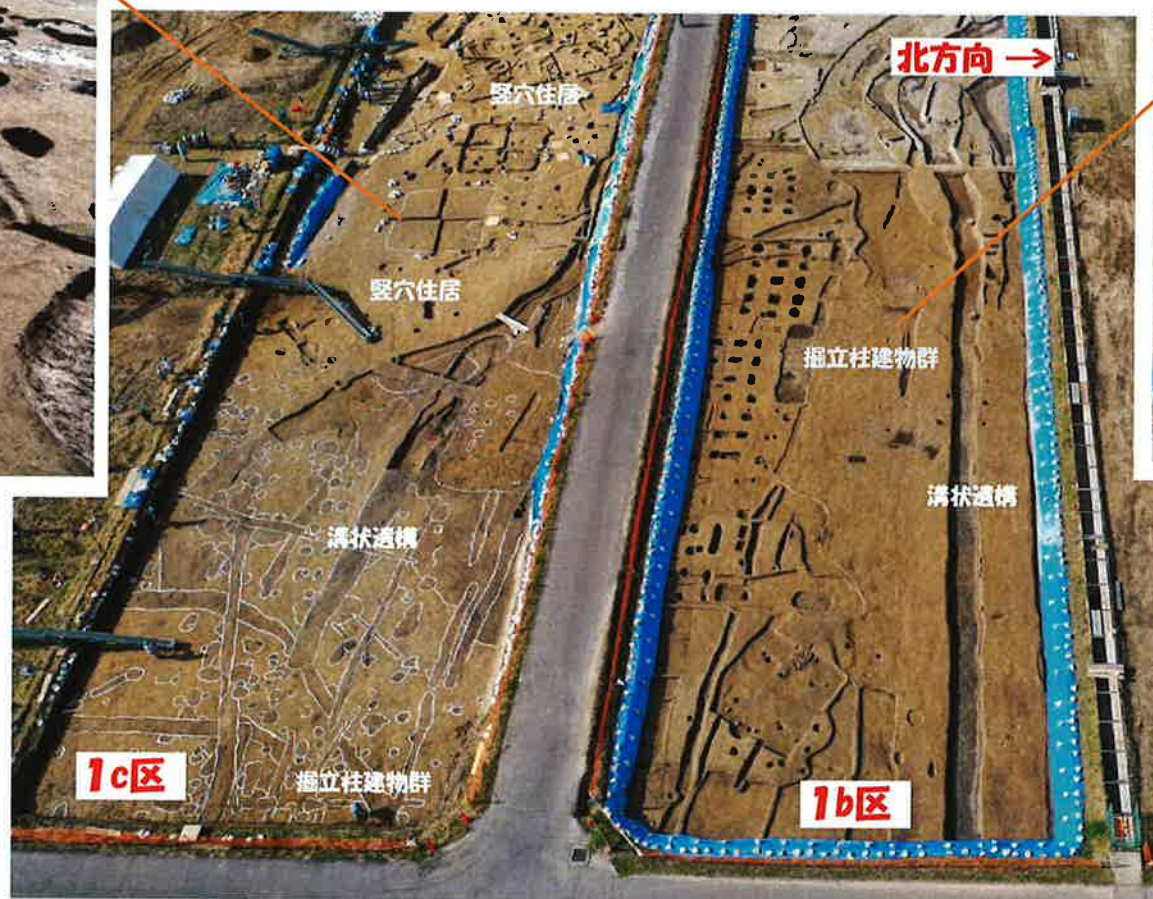


竈 (かまど) 跡

調査区からは竪穴住居が12棟以上確認されています。竪穴住居とは地面を掘り下げて床面をつくる建物のことを言います。ここで確認された竪穴住居は全て四角形で、一辺が5m~7m程度の大きさをしています。

住居は北、もしくは北西の方向に竈(かまど)をもち、竈の跡からは炭や焼けた土とともに、煮炊き等に使用したと思われる土師器(はじき)の甕等が見つっています。出土した遺物はその形状などから7世紀頃のものだと推定されます。

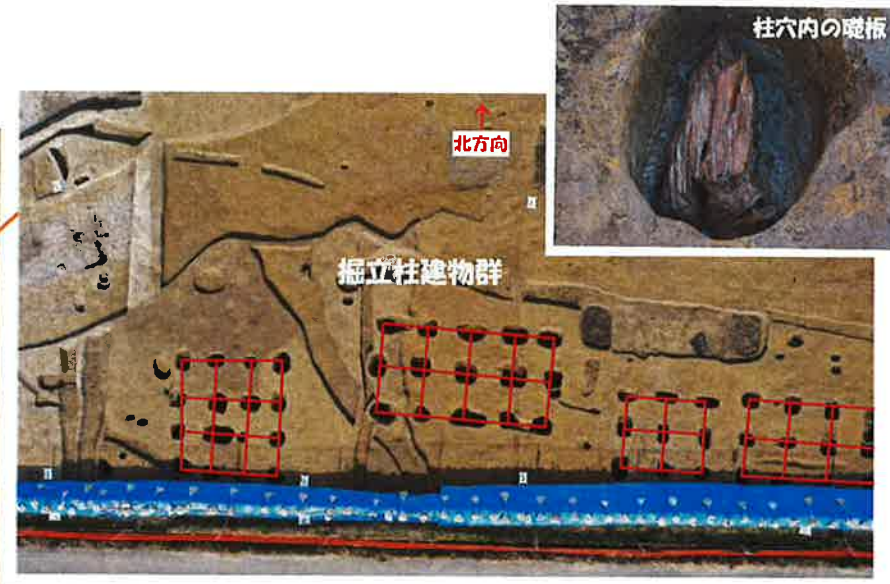
同じエリアに何棟もの住居が重なって見つかり、短い期間の中で何度も建て直しをしながら居住していたようです。また住居内からは鉄製品の製造を想わせる遺物も出土しており、生活だけでなく小規模な工房としても使用されていた可能性があります。



北方向 →

1c区

1b区



柱穴内の礎板

北方向

調査区内からは掘立柱建物(ほったてぼしらたてもの)や溝状遺構が複数確認されています。

掘立柱建物とは、地面に穴を掘り(柱穴)、そこに骨組みとなる柱を立てたもので構成された建物のことをいいます。

今回見つかった柱穴を詳細に観察すると、柱は穴の中に立てられ、その周りを埋めて固定していました。穴の底には柱が沈まないよう礎板(そぼん)や礎石(そせき)を設置しているものもありました。

柱穴の個数や並び方から、4本柱の正方形の建物や、6本柱の長方形の建物、また、ほぼ等間隔に柱を立てた総柱(そうぼしら)状の建物など全部で22棟以上あったことが確認できました。総柱状の建物は倉庫のような建物であったと考えられます。

溝状遺構は文字通り溝状を呈する遺構です。空間を区画するものや、人や物の運搬に使用される大規模なものなど、その大きさや形状から、様々な用途が考えられます。1b区の調査では東から直線的に伸び、途中で北東方向に大きく蛇行する3条の溝状遺構が確認されました。



←北方向

薬師堂廃寺跡

道路状遺構

溝状遺構

1e区



道路状遺構

1e区(2面)からは、道路状遺構や溝などが見つっています。道路状遺構は、東西方向にまっすぐに伸び、南側と北側に側溝の機能を持つ小規模で狭長な溝が配置されています。溝の中心軸の距離間は、4.2m(約14尺)で、幅の広い道であったことがわかりました。

側溝から出土した須恵器などの遺物から、飛鳥時代~奈良時代中頃のものと考えられます。

また、道路状遺構の南側に、南方向(五条川)に向かって伸びる大きな溝状遺構が見つっています。この溝状遺構は出土した須恵器(すえき)などの遺物から、奈良時代後半以降のものと考えられます。

これらの状況から、1e区では、道路状遺構が消失した後に、五条川へと伸びる大きな溝が作られたことがわかりました。